

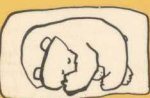


畑 正憲



ムツゴロウの純情詩集

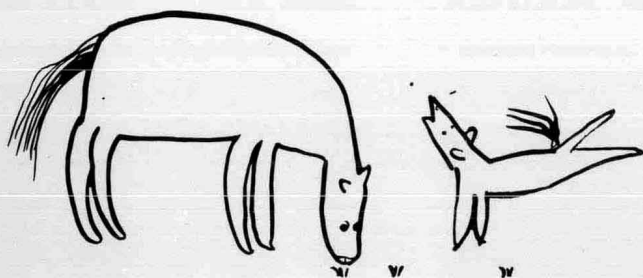
中央公論社



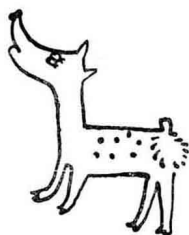
Pochi

ゴロウゴロウの純情詩集

止憲



中央公論社



ムツゴロウの純情詩集

© 1976 検印廃止

昭和51年2月10日 印刷

昭和51年2月20日 発行

著者 畑 正 憲 発行者 高 梨 茂 印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2丁目1番地 振替東京2—34番

目次

弟子志願	・	5
純情日暮れ	・	84
栗毛のタニ	・	102
犬が咬む	・	121
帰ってこい大作	・	139
北国の青い空	・	157

カット・著者

ムツゴロウの純情詩集

弟子志願

人、住み集まりてその数十三。まわりに巢喰う動物が百。

これだけ生き物が密集するとほって置いてもいろいろなことが起こる。土や砂でも雨が降れば山津波になるし、角栄さんだって総理になれば物価を吊り上げる。ましてや生き物が事件を起こさないわけがない。この世で一番厄介な代物は生き物である。

今朝も今朝とて、もうじき二歳になる甥っ子がやってきて、

「ムツゴロおじちゃん」

「ほいよ」

「おしっこ！」

「ありやりや」

便所に連れて行って抱えたがなかなか出ない。かつがれたかなと、

「これ。出ないじゃないか」



と、舌打ちをして左右にゆすったら、

「三分間待つのだぞ」

甥は待ちかねたようにそう言って威勢よく筒から水を出した。

筒とはいえど、まだまだ正規の形状をなしているわけではなく、しなびた唐辛子程度であり、筒を筒たらしめる内部の組織よりも皮の方が多い感じである。

その先っぽに水滴が光っている。私はそれを拭いてやろうと紙へ手を伸ばしかけたが、待てよ、と思い直した。

男は紙を使わないものだ。歴史学者が考察してきたように、男は昔からボディアクションでその水を切ってきた。

「これはしたり、甥っ子よ」

と、私はかなり慌てて、

「このムツゴロおじさんはだな、男の子を育てたことがないから、危うく間違いをしでかすところであった。男は黙って振り振りチョンだったのだよなあ。生き物の専門家が性教育の第一歩を間違えたらいけないよなあ」

しばし反省。

続いて皮だらけの筒を指で弾くと甥が抗議した。

「痛い！」

「痛いものか」

「痛いよう」

「そのくらいで痛がっていたら偉い人間になれないよう」

「人間、こわい」

「うむ、こわいか」

「こわい。人間こわいよう」

甥は抱かれている体にきゅっと力を入れた。

人里離れた原野に住んでいるので、甥は日本じゅうの誰よりも人を日撃することがすくない。同時に、周りの事物を認識出来るようになった頃から動物と一緒に育てられたので、動物のほうを身内だと考えている節がある。だから子牛ほどもある犬には平気で近づいていくし、体重が一トン近い馬さえこわがらない。しかし、見慣れぬ人がくると極端におびえる。

特に魔の季節、夏には彼がしばしば注進にきたものだった。

「おじちゃん。ゲート。人間、いる」

「ほう。いるか」

「人間、いる。困ったねえ」

動物と一緒に育てられてもそこは人間、私の困惑まで察している。

私は山門然とした鋼鉄のゲートを有していて、不意の来訪者をかたくことわっている。如何なる理由があろうと中へは入れないのだが、花が咲き始めると、しばしば門の前に若者が立つ。

これには、テレビが影響するところ大である。私はしまりのないオッチョコチョイだから、お

だてられるとつい図に乗ってテレビに出る。それも——たいていは道化役者として。

テレビという代物は、どうも、人間以上にこわい存在であるらしい。視聴率がひとけたであっても、何百万人かが観ているものらしく、したがってテレビの画面に登場すると、顔を知られ、存在する場所を憶えられてしまう。だから見知らぬ男女がやってくるのだ。

私はいつも思う。

「馬鹿にしない。見物にくるとは何ごとであるか」

そして出演の話が持ち込まれるたびに、ディレクターやプロデューサーにこう申し上げる。

「今こそ本心を打ち明けますが、私が得意な分野は哲学や神学でして、よろしい、出て差上げましょう。ですが、今度こそは、地球と人類の未来について憂うる話をしましょう」

すると、局の人々ほとんどないというふうに手を振り、

「こ、困りますです、ハイ」

「なぜ？」

「この世の行末について憂えてくださる方はたくさんいるのですよ、ハイ」

「でも……」

「当方としてはですよ、ハイ、一服の清涼剤としてですよ、あなたにお越しいただきたいのです、ハイ」

「清涼剤？」

「つまりですね、ハイ。重苦しい番組が続き過ぎても何ですから、ハイ、あなたにはそのままの

姿でおいでいただきたいのでして」

清涼剤とは何であろうか。サイダーやコココーラを清涼飲料水と称するからには、それに似たもので粉末のもの、要するに粉末サイダーみたいなものだろう。

かくて、苦虫を噛みつぶしたような私の顔は、永久にブラウン管から追放されることになり、北海道旅行でお金を使い果たした青年がゲートの前に立つようになる。たいていは何日も野宿しているの、一種妖怪じみた格好をしていて、それを甥がこわがり、筒をはじいたくらいで痛いなどと言うようでは立派な人間にならないといういましめに対して、

「人間、こわい」

と、言わしめるのである。

私は声をはげまし、

「こら。しっかりせい。そんなことでどうするか」

「……」

「甥っ子よ。大志を抱けだ。お前、大きくなったら何になる」

「蛙になってガアガア鳴いてるよ」

甥はどういうわけか、蛙やホヤ、ナマコの類に親近感を持っている。

かつて私は蛙についての詩を書いた。それは美学的であり、かつまた動物学的な感動を盛りこんだ一大叙事詩であるが、そのごく一部を左に書き写そう。

赤い雌蛙がおりました。

青い雄蛙もおりました。

粉雪さらさら

凍ってとけて

春になったら結婚式。

赤と青とが結婚したよ。

交通信号みたいな夫婦

♂上位でGO

♀上位でSTOP

生まれた子供は黄色かな

と思ったら大間違い。

中間型として紫が出現したのであった。

では……

その紫の子と灰色の子が結婚したれば

何色が出るかとメンデルじいさんに訊いたれば

わしゃ知らぬ

画家をつかまえ訊いとくれ。

叙事詩のことだから、まだまだ続きがある。その中には、紫と灰色を混合する色彩学、果ては核酸（DNA）の合成とメンデルの法則などなどの有用な知識が織りこまれている。そしてついに、あらゆる色が混合した結果として、真黒の蛙の子が生れてエピソードが近づいてくる。ついでにその一節を――

黒き蛙よ

闇のように

漆のように

人未だ生まれざる太古より

地中で眠る石炭のように

黒き蛙よ

起きよ

春なれば

目醒めよ

春なれば

おや

冬眠しているお前の黒い腹部に
黒いポチポチついておる。

ああ 判ったぞ

朝立ちだな

凜々しき青年黒蛙よ

曠野をめざせ

物語はようやく核心に近づいてきたようだ。問題はこのエピソードに近い一節をある乙女に見せた時に始まる。

ああ、しかしどうして文字というのはこうまどろっこしいのだろう。いくら私が道化だといつても、黒き蛙の「朝立ちだな」のくだりを、いきなり乙女に見せたりはしない。そこはそれ、見るべき必然性が介在していたのである。まわり道にはなるけれど、その乙女に出遇うまでの経過を私は説明しなければならぬ。

およそ二年前のある晴れた朝のこと、私は一通の封書を受け取った。

——ムツゴロウ様

その文字を見ただけで、差出人が女であると断定出来た。裏を返すと、神戸市××と美しい字が読み取れた。もちろん私は、何はともあれ、震える指で封を切った。

——新愛なるムツゴロウ様。わたしは神戸T大の二年生です。

目もくらむ思いであつた。新愛が誤字だなどとはけつして思わない。愛するなどという陳腐な呼びかけよりずっと素敵だとニンマリしさえした。

加えて、その文面が何と優美であつたことか。文章はなめらかで、優しさに充ち、思いやりであふれていた。字句と字句が韻をふんで心地よく連なるかと思えば、ふつと乱れ、やるせない女心をほの見せていた。それはちょうど、乙女の白いうなじでそよぐおくれ毛のようであつた。

私は目の奥に、生暖かい恋の魔風を吹きこまれた気がした。
と、妻が、

「どうなさいました」

「いや、なになに」

私は急いで額に八の字をよせた。

「何だか変ですよ」

「変だと？」

「はい。ただならぬ様子ですけど」

「ふむふむ。ジフテリアか水疱瘡の徴候が顔面に現われておるのか」

「いいえ。感激の様子」

「馬鹿なもの。手紙などを読んでいちいち感激しておられるか。感激とか感動というものは、ギリシャ悲劇を読む時のためにとっておくものだ」

私はヤバイぞと判断し、さりげない動作で封書をポケットに入れると、

「後でお茶をくれ」

ぶっきらぼうに命じて急造の書齋へと立った。

ストーブの火をつけた。

「どうしようかな」

答は分かっているのに独り言をもらした。

「見るだけで愉しいだろうな」

それできなかった。私はかじかんだ手をボンと叩いて机に向かい、取って置き of 便箋を広げたのだった。

手紙の末尾には、正月の休みを利用して冬の北海道を見たい、その途中で寄っていいかと書いてあった。

——はなはだ不躰とは思いましたが、一生一代の勇をふるって、蟻のように小さくなってお願いいたします。

私は相好をくずし、一気にペンを走らせた。

——蟻のように小さくならないでよろしい。象みたいにでかくなって堂々と来訪されよ。私の国には年に一人しか入国させないきまりですが、その一人としてあなたを歓迎いたします。むろんこの旅行にはご両親の賛同が得られたものと信じますが、いやいや、女子大の二年生とあらば大人ですね、来年は愉しい正月になりそうです。

封筒に入れ、ペタンと赤い速達のはんこを押した。